

〈放送史への証言〉 竹山昭子さん (放送史研究家)

戦前・戦中・戦後を通してみた 体験的放送史

後編：初期マス・コミュニケーション研究から民間放送の現場へ

メディア研究部 (メディア史) 加藤元宣

放送史研究の第一人者として精力的な研究活動を続けておられる竹山昭子さんに、ご自身の体験談も含めて、戦前・戦中・戦後を通しての放送に関するさまざまな話を聞いた。

前月号 (2011年12月号) では、その中の戦前・戦中のラジオ放送の実態—2・26事件の『兵に告ぐ』や終戦時の『玉音放送』など—についての話をとりまとめ、前編として掲載した。

今月号では、これに引き続いて、民間放送の創成期における女性アナウンサーとしての体験や放送史研究に対する取り組みなど、戦後の竹山さんの活躍に焦点を当てて、後編として掲載することにした。

生涯の恩師・南博先生

——これから戦後における竹山さんのご体験について、話をお聞きしたいと思います。

竹山さんは、日本における社会心理学のパイオニアであり、マス・コミュニケーションの研究にも取り組まれた南博さんの指導を受けたと

竹山昭子 (たけやま あきこ) さん



1928年東京生まれ。日本女子大学文学部社会福祉学科卒業。東京放送 (TBS) アナウンス部勤務を経て、61年にフリーとなる。社会心理研究所 (南博氏主宰) のメンバーとして研究活動を行い、83年立正大学短期大学部で教職に就く。88～97年、昭和女子大学文学部教授。主な著書に、『玉音放送』 (晩聲社、1989年)、『ラジオの時代—ラジオは茶の間の主役だった—』 (世界思想社、2002年) など。



「南先生の傘寿・出版を祝う会」での南博氏と竹山さん
(1994.10.28) ※ 下は司会をする竹山さん

ということですが、南さんはどのような方だったのですか。

竹山 南博先生は、大正3(1914)年、東京のお生まれです。慶應義塾幼稚舎、東京高等学校(旧制)¹⁾から東京帝国大学医学部に進学されました。南先生のお父様の南大曹という方は評判の名医で、当時の京橋区木挽町(現在の中央区銀座)で南胃腸病院を開いておられたとうかがっています。

お父様の意向もあって医学部に進まれたのだと思いますが、南先生は、自分は医学の道には合わないと思われたのでしょうか、昭和12(1937)年、医学部を中退して、京都帝国大学文学部哲学科に転校されます。そして、昭和15(1940)年に京大卒業後、アメリカのコネル大学²⁾の大学院に留学し、そこで心理学を専攻して、ドクターを取得しておられます。

南先生が日本に戻ってこられたのは、太平洋

戦争が終わった後の昭和22(1947)年3月のことです。

南先生は、京大で演劇部に所属するなど、当時の非合法活動の周辺におられたようで、当局から要注意人物の一人としてマークされていたとうかがっています。南先生は、その頃のことを顧みられて、「(両親が)国内にいれば、危険がほくの身に及ぶことを考慮して、アメリカ行きという、より小さなリスクを選ぶ気になったのかもしれない」³⁾と書いておられます。

戦時中、敵国アメリカにとどまり研究を続けておられたときには、「敵性外人」ということで色々なご苦勞をなさったようです。それでも、アメリカ国務省から「交換船で帰国を希望するかどうか」という問い合わせが来たときには、即座にノーと返事をされています。その理由は、「帰国したらとても無難にすむわけではない。まして地下の抵抗運動などやれる自信は全くなかったから、戦争協力や投獄よりは、ほくなりの方の亡命生活の方がいいと判断」⁴⁾されたからでした。

また、南先生は、その当時のご心境を振り返って、「ほくとしては学問を通して、戦後の故国で役に立ちたいという気負いがあった」⁵⁾とも述べておられます。

初代南ゼミこぼれ話

——南さんとは、どのように出会われたのですか。

竹山 当時、私は日本女子大学の社会福祉学科に在学していました。南先生は昭和23(1948)年4月から、社会福祉学科で社会心理学の講義を行われました。私が最初に南先生に接したのは、そのときです。

南先生が女子大生の間でどのような存在だったかと申しますと、先生のソフトな話しぶり、やさしいまなざしにお熱を上げる学生がたくさんいて…(笑)。先生の講義は、社会福祉学科の学生だけでなく、他の学科の学生まで聴講するわけです。ですから、広い教室なのに立ち見も出るほどで、いつも満員御礼の状態でした。私もそのうちの一人だったのですが、大学3年でゼミを選択する段階になって、やはり南先生のところで社会心理学をより深く勉強したいと考えました。

当時、南先生は、一橋大学でも社会心理学を教えておられたので、一橋大学と日本女子大学のそれぞれでゼミの学生を受け持っておられました。これは今から考えるとびっくりするようなことですが、南先生のご自宅の応接間で一緒にゼミをやるのですよ。こちらから言えば女子大学ですから、男子学生と一緒にゼミ

というのは何となく心ウキウキなんですね(笑)。一橋の学生にとっても、あちらは男子だけなので同じ思いだったかもしれません。分かりませんが…。

当時のゼミの仲間には、一橋のほうに、加藤秀俊⁶⁾、辰濃和男⁷⁾、石川弘義⁸⁾、佐藤毅⁹⁾。また、日本女子大学の私の同期には、高野悦子¹⁰⁾、田辺幸子¹¹⁾などがおりました。

南先生の指導ぶりは「ああしろ、こうしろ」ではなく、自由そのもの。先生はヒントを与えるだけで、学生の発言をそのまま受け入れてくださいました。従って、学生は自分で考えて結論を出すのです。南先生は学生をやる気にさせる名人でした。

——南先生のゼミでは、どのようなテーマについて、ご研究をなさったのですか。

竹山 それが、南先生から最初に与えられたテーマが、何と「大衆娯楽」なんですね(笑)。

映画、演劇、流行歌、大衆文学など、大衆娯楽の実態調査と内容分析です。どれを選ぶかは学生の希望で決めることができました。私は「流行歌」を選択しました。メンバーは、一橋の加藤秀俊、辰濃和男、日本女子大の田辺幸子と私(当時は楢木昭子)の4人です。

まず取り掛かったのが、ヒット曲のサンプルを集める作業でした。キング、コロムビア、ビクター、テイチク、ポ



「南博先生教壇30年記念の集い」初期のゼミ仲間と南博氏を囲んで(1978.4.28)

※ 前列左から3番目が南博氏、前列右端が竹山さん

前列左から4番目が高野悦子氏、6番目が田辺幸子氏

後列左から5番目が石川弘義氏、6番目が佐藤毅氏、右端が辰濃和男氏

リドールの5社の試聴会に毎月行って、その月に発売されるレコードのパンフレットをもらってくるのです。

そして、それぞれの歌の歌詞の内容から、それがどういうことを歌ったものなのかという分析を行いました。これには、流行歌の歌詞の中でどういう言葉が何回使われているかをカウントするという方法を用いました。

この分析からどういう結果が得られたかといえますと、歌詞に使われていた語句の中で一番多かったのは「夢」でした。日本人が思い描くのは「遠い夢」であり、「かなわぬ夢」だったのですね。南先生自身、「流行歌の歌詞の中に、日本人の無常観、運命主義、マゾヒズムの傾向などをみた研究」¹²⁾だったと記していらっしゃいます。

分析結果は、『思想の科学』¹³⁾第5巻第2号(1950年4月)に、「日本の流行歌」として掲載されました。執筆者のところに、南博と並んで4人の名前が記されているのを見て本当にうれしかったですね。まだまだ未熟な学生の身分でありながら、自分の名前が活字になったことがうれしくて舞い上がりました(笑)。

前回、戦争中の『ラジオ講演』についてお話をしたのですが、その中で「天皇キー・シンボル」が非常に多く使用されていたということを申し上げました。今になって気づくのですが、学生時代のこの流行歌の分析を思い出して、「ああ、キーとなる言葉をカウントする、あの方法でやってみたらどうだろう」とヒントを得たのだと思います。こうしたことを振り返ってみても、私は、南先生から本当に多くのものを与えていただいたと、深く感謝しています。

アナウンサー試験に合格するまで

—— 竹山さんは、その後、開局時のラジオ東京(現TBS)に入社し、女性アナウンサーとして活躍します。なぜ、アナウンサーを志望されたのですか。

竹山 私には、父親を戦争中に亡くしておりましたので、大学を卒業するとすぐに働かなければなりません。そこで、進駐軍の施設・物資・役務の調達や管理を扱う特別調達庁という役所に就職し、調査・統計の仕事をしていたのですが、その間、放送の仕事をしたという思いを捨て去ることができませんでした。

そこで南先生に「私はどうしても放送の仕事をしたいのですが」と相談しますと、「今度新しく民間放送というものができるから、そこに行ったらどうか」と言われました。そのとき紹介されたのが、ラジオ東京でした。

その頃、電通の吉田秀雄¹⁴⁾社長が新しくスタートする商業放送設立のために「ラジオ広告研究会」というものを立ち上げていました。というのも、日本で果して民間放送の経営が成り立つかどうかが一番の課題だったからです。民間放送を成功させるためにはスポンサーを獲得しなければなりません。そのための研究会で、「商業放送とは」「コマーシャル・メッセージとは」などについて、企業を対象にPRに努めていました。

この「ラジオ広告研究会」の講師に南先生が招かれて、「マス・コミュニケーションとは何か」という講義を担当しておられました。そういう関係で、南先生は昭和26(1951)年には民間放送が誕生するということを知っていらしたのです。それで私にラジオ東京を勧めてくださったのです。



アナウンサー時代の竹山さん

なぜ私がアナウンサーになったのかというと、アナウンサーは一般職よりも長い養成期間が必要なのです。そのために、アナウンサーの採用試験は、一般職の採用試験よりも早く実施されたのです。昭和26(1951)年9月にアナウンサーの採用試験があったので受験しました。なぜか合格したので、アナウンサーになったということなのです。

ラジオ東京が正式に開局したのは、昭和26(1951)年12月25日ですが、このときのアナウンサーは全員で23名でした。内訳は、ゼロ期といって、NHKから来た人、満電(満洲電信電話株式会社)¹⁵⁾のアナウンサーだった人、つまり経験者が8名(男性6名・女性2名)、そして、私のように9月の採用試験で入った一期生が15名です。男性は9名、女性は6名でした。

当時は“アナウンサーといえば男性”でした。スポーツ実況やニュース、クイズの司会などで活躍し花形アナウンサーとして名を残しているのはすべて男性です。日本放送協会が放送を開始して26年、アナウンサーといえば男性だったのです。女性アナウンサーは料理番組や子供の時間、婦人の時間、また一番多かったのが番組の枠のアナウンスで、文字どおり“額縁”として中身の絵に光を当てるアナウンスでした。

こうした状況の中で民間放送がスタートした

のです。民放ではコマーシャル・メッセージが重要な役割を持ち、聴取者に語りかけ、寄り添うものでなければなりません。そこで、女性アナウンサーのソフトな語り口が求められたのだと思います。

ちなみに、NHKの昭和26年採用のアナウンサーは、31名すべてが男性、女性はゼロです。翌昭和27年も採用30名の内女性は1名です¹⁶⁾。これに対してラジオ東京は男性15名、女性8名ですから、男性の約半数は女性でした。この数字は、民放における女性アナウンサーへの期待の高さを示すものといえるでしょうね。

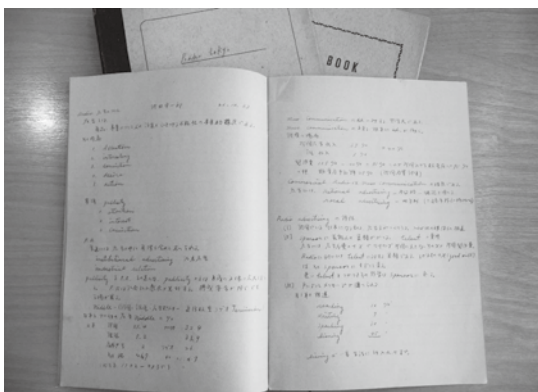
養成研修の錚々たる講師陣

——ラジオ東京に入社して受けられたアナウンサー養成の研修がどのようなものであったか教えてください。

竹山 これがかつてのアナウンサー養成のときのノートです。今となっては、ずいぶんと古めかしいものになってしまいましたね。

このノートを見ますと、研修は昭和26(1951)年10月19日から始まっています。

まず初日は、午前10時から、当時の編成局長の金沢覚太郎さんが「民間放送の使命」とい



う内容の講義を行っています。金沢さんは、戦中に満電の放送部門におられた方で、そこでの広告放送の経験を買われて、開局時の編成局長になられたのだと思います。

そして同日、午後3時から、業務局次長兼整理部長の鳥居博さんが、「商業放送について」という講義をされています。この方は、ラジオ東京に来られる前には、通信省やその後身の電気通信省で、電波三法¹⁷⁾の成立のために尽力なさった方です。

その他、社外講師では、新田宇一郎¹⁸⁾さんが「ラジオ広告について」、また、石川欣一¹⁹⁾さんが「日本語と英語」、安藤鶴夫²⁰⁾さんが「ラジオ演芸」という話をしてくださいました。今から考えてみると、本当に錚々たる顔ぶれの講師陣が得難い話をしています。

——アナウンスの講習では、どのような方が講師を担当されたのですか。

竹山 個々のアナウンス技術の指導は、NHKから転職されたアナウンサー室長の植松康郎さんがしてくださいましたが、社外講師ではNHKの大ベテランで、すでにNHKを離れておられる方が講義をしてくださいました。お名前を挙げればすぐ分かると思いますが、松内則三²¹⁾さんや和田信賢²²⁾さんです。当時はNHKしか放送局はなかったのですから、アナウンサーという存在はイコールNHKだったのです。ですから、NHK出身の方が教えるのは当たり前のことだったと思います。そこで、非常に高いレベルの指導をしていただいたことを、とてもありがたく思っています。

その中で、特に印象に残っている講義は、昭和26(1951)年11月7日に、和田信賢さんが担当された「アナウンスについて」というものです。和田さんは、そこで、NHKの代々のアナウン

サーをタイプ別に分けて話してくださいました。朗読調は中村茂²³⁾、話しかけ調は松田義郎²⁴⁾、美文麗句調は松内則三、報告調は河西三省²⁵⁾というふうに、NHKの先輩たちのアナウンスのスタイルを分類しているのですね。そのときは唯「へー」と思って聞いていたのですが、今改めてこれを見てみると、なるほどという感じです。大変的確で面白い分析をなさっていると…。

——和田信賢アナウンサーは、昭和20(1945)年8月15日の『玉音放送』の進行を担当した方ですね。竹山さんはこの研修を通して、その人から直接、アナウンサーとしての薫陶を受ける機会に恵まれたというわけですね。

竹山 そういうことです。今でもはっきり記憶している言葉があります。和田さんは講義のおしまいに「アナウンスは信頼のみ」と強調なさいました。「信頼」こそがアナウンサーの命だと言われたのです。残念なことに、和田さんは、この研修の翌年の昭和27(1952)年に、ヘルシンキオリンピックの実況放送を終えて帰国なさる途中で、パリでお亡くなりになってしまいました。まだ40歳という若さでした。

凜とした声、歯切れのよいアナウンス、そして格調の高い叙述は聴く者の心を捉えました。未だに和田信賢さんを越えるアナウンサーは出ていないと思いますね。



和田信賢アナウンサー

開局当時のラジオ東京

竹山 アナウンサーの養成研修は、昭和26(1951)年の11月いっぱいでした。

それでいよいよアナウンサーとしての勤務が始まるのですが、その当時のラジオ東京は有楽町の駅前、現在の新有楽町ビルの建っているところにあった毎日新聞の社屋の新館の6階、7階、8階でした。

ラジオ東京の設立には朝日、毎日、読売の3新聞社や電通などが関わっていましたが、中でも毎日新聞が最も有力な協力者でした。そのときのラジオ東京の専務は鹿倉吉次²⁶⁾という人ですが、この人は毎日新聞の出身です。鹿倉さんは、苦学をされた後に大阪毎日新聞に入社し、大阪朝日新聞との熾烈な拮据競争で抜群の業績を上げて専務にまでなった人で、毎日新聞の経営に非常に貢献のあった人ですね。そういう関係から、毎日新聞の新館が新しいラジオ東京の社屋になったわけです。

けれども、開局が目前に迫った12月になっても、まだ改修工事中でトンカチをやっている状態で、新しい社屋の中には入ることができませんでした。そこで、屋上に行って研修が終った記念写真を撮りました。この写真の丸い屋



同期入社男性アナウンサーたちと (1951.12)

根は毎日新聞のビルにあったプラネタリウムの屋上です。

ところで、この写真をよく見るとほとんどが男性です。女性は、たった一人だけです。そのたった一人の女性というのが、誰だろう、この私です(笑)。当時、私がいかにおてんばであったかということ、如実に物語っていますね。滑り落ちたら危ないところなので、他の女性はみんなこういうことをしていません。

当時の写真を、もう1枚、お見せしましょう。これはラジオ東京の開局前夜にアナウンサーが集合して撮ったものです。本格的に放送が始まってしまえば、アナウンサー全員が顔を合わせることはもうないだろうという思いで、受付の前に集まって撮ったのですね。



ラジオ東京開局時のアナウンサー (1951.12.23)

写真の前列左から2人目が、植松康郎アナウンサー室長です。その周りにゼロ期と呼ばれるNHKや満電などから来た人たちが並んでいます。後ろにいるのが新人のアナウンサーたちです。

——竹山さんの声が、最初にオンエアされたのはいつですか。

竹山 開局当日、昭和26(1951)年12月25

日午前6時50分から放送された『朝の御案内』という5分間の番組です。この番組は、音楽をBGとして、色々なスポンサーのコマーシャル・メッセージを順番に読み上げていくというものでした。生放送ですから、極度の緊張からどうしゃべったか全然分かりません。ポーズとなってスタジオを出てきますと、早朝にもかかわらず、広告代理店の担当者がちゃんとスタジオの前にやってきていて、「ご苦労さまでした」と言って榮太郎の黒あめをくださいました。コマーシャル・メッセージの中に、榮太郎の黒あめがあったのですよ。未だに忘れないですね。私にとって初放送というのは、心臓が飛び出すのではないかと思うくらい緊張しました。榮太郎の黒あめはとてもおいしかったです。あっ、ここでまた、コマーシャルを言ってしまいました(笑)。

——新人アナウンサーは、コマーシャル・メッセージからスタートするということだったのですね。

竹山 そうです。コマーシャル・メッセージは新人アナウンサーが担当することが多かったですね。そのことについて、当時、私はあまり疑問を持ちませんでした。とにかく与えられた仕事をこなすことで精一杯でした。

でも、60年が過ぎた今になって思うのですが、民間放送が始まったときに、コマーシャル・メッセージを新人のアナウンサーに読ませたことは、間違っていたのではないかという気がしているのです。

それは、コマーシャル・メッセージの内容がだんだんと高度な表現技術を要求されるようになると、技術的に未熟な新人アナウンサーでは対応できなくなってしまったからです。文学座や俳優座の俳優など、色々な劇団の人が

ドラマティックなコマーシャルをやるようになります。

こうした状況に対処するために、開局から2年目ぐらいのときに、内村直也²⁷⁾さんを講師に招いて、音声表現技術の向上を図る講習会を開いたのです。けれども、そのときにはすでに手遅れでしたね。

こうしてコマーシャル・メッセージの担い手は、高い表現能力を持つ演劇人にとって代わられてしまうことになるのです。商業放送におけるコマーシャル・メッセージの重要性をしっかりと認識して対処すべきであったのではないか、という気がしています。事実、『ACC／CM年鑑』は、初期の民間放送局の姿勢をこう記しています。「コマーシャルの演出、コマーシャル・アナウンスの技術開拓で劣るところが多く、総合ラジオ広告には、およそ縁遠い状態であった」²⁸⁾。

——コマーシャル・メッセージの表現技術は、すさまじい勢いで高度なものになっていったのですね。

竹山 そうですね。初期のストレートアナウンスから、どんどん技巧的なものになっていきました。

なお、歌を使ったシンギング・コマーシャルは、民間放送が始まった初期の段階からあり、多くの人々に受け入れられ好評でした。

昭和26(1951)年当時、NHKでは三木鶏郎²⁹⁾の世相風刺と歌とコントでつづる「冗談音楽」が非常に評判になっていましたが、その内容が体制批判的であるということで、政府筋から強い圧力がかかりますようになります。ちょうどその頃に民間放送が開局し、人気のあった三木鶏郎にコマーシャルソングを依頼し、日本で初めてのコマーシャルソングである「ぼくはアマチュア・カメラマン」が生まれたのです。

スポンサーは小西六写真工業ですが、社名や商品名は出てきません。加えて、マイナス要素を強調した“アラ ピンボケダ オヤ ピンボケダ”のリフレインが受けて、レコード会社が一般用に売り出すほどでした。そして、この後、三木鶏郎は“ワワワ 輪が三つ”など数多くのコマーシャルソングを手掛けていくことになります。

印象に残る担当番組

—— 竹山さんが、アナウンサー時代にご自分で担当された放送番組の中で、特に印象に残っているものは何ですか。

竹山 私が放送の現場で仕事をしていたのは、TBS（ラジオ東京）のアナウンサーであった10年間、その後、5～6年間フリーとしてやっておりました。

その中で特に強く印象に残っている番組は何だったかと申しますと、それは『ご婚約者の横顔—正田美智子アルバム』です。

昭和33（1958）年11月27日午前11時30分、宇佐美宮内庁長官は、放送を通じて皇太子妃が正田美智子さんに決定したという発表を行いました。『正田美智子アルバム』は、この宮内庁長官の発表に続いて放送されたものです。私は、ナレーションを担当しました。

当時の宮内庁担当の記者などの間では、美智子さんに決まるということが、事前にある程度分かってはいたのですけれども、自発的報道管制によって公にすることができなかったのです。

この番組は発表の前夜遅くに報道部の宿谷礼一、福本眞が制作しました。当時はまだVTRが開発されておられませんでしたので、フィルム映像に音づけをするために社外の映画録

音スタジオで番組を作りました。

そのとき初めて正田美智子さんという女性の映像に接して、その気品と聡明さに魅せられました。まだ聖心女子大を出たばかりの20歳ちょっとの若さなのに非常に品格があると強く感じました。日本ではもう死語になっている、奥ゆかしさというものを持っていらっしゃる。この人は特別な女性だという印象を非常に強く持ちました。そして、こうした記念すべき番組を担当したことを誇らしく思ったものです。

いまひとつ、現役時代の体験で非常に強く印象に残っているのは、自分の発言への悔恨の思いです。そのときには気がつかなかったのですが、後々になって「ああ、私は何ていうことをしたのか」という悔恨の情に駆られた番組がありました。

ラジオ東京が開局してまだ2か月そこそこの、昭和27（1952）年2月28日のことです。私は、アメリカの有名な映画監督、フランク・キャブラ³⁰にインタビューをしています。『或る夜の出来事』『スミス都へ行く』『オペラハット』など、大ヒットした映画をハリウッドで何本も作った監督です。

ここに当時のメモがありますが、私はこういう質問をしています。「キャブラさんはいろいろな映画を作っていらっしゃいますけれども、日本の映画をご覧になっていらっしゃいますか」。そのときフランク・キャブラが何と言われたか記憶していませんが、インタビューを終って、私が差し出したメモに「ベリー・ベリー・チャーミングインタビュー」と、お世辞のメッセージを書いてくださったのです。私はこれを受け取って、ウキウキ気分でした（笑）。けれども、そのウキウキ気分が悔恨の情に変わるの、それから40年後のことです。

平成3(1991)年に山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催されましたが、私は、そのときの資料を見て、フランク・キャプラが、太平洋戦争中に、アメリカ陸軍省の委託を受けて何本ものプロパガンダ映画を作っていたことを知ったのです。私は強いショックを受けました。

フランク・キャプラが作ったプロパガンダ映画の中に、『汝の敵日本を知れ』というのがありますが、それが平成9(1997)年5月17日にNHK衛星第1で放送されました。この映画は、日本人の神道や権力への追従と軍国主義を強調する完全なプロパガンダ映画でした。つまり『汝の敵日本を知れ』は、日本人に敵愾心を抱くようにアメリカの兵隊を教育する目的で作られた映画なのですね。そして、全編を通じて日本の劇映画、ニュース映画、記録映画が再利用されておりました。

私はこの放送を見て、本当に強い衝撃を受けました。もし、当時、私がこの事実を知っていたら、フランク・キャプラに「日本の映画をご覧になっていらっしゃいますか」なんて、そんなばかげた質問をするはずはないですね。キャプラはきっと「この人は何にも知らないな」と心の内で笑っていたと思います。もっとも、昭和27年当時、アメリカのプロパガンダ映画の情報は日本に伝えられていなかったのが致し方のない面もありますが…。いずれにしても深い悔恨の思いの残るものでした。

私は、その後、この『汝の敵日本を知れ』という映画のメッセージの内容を分析した論文³¹⁾を執筆しました。この論文は、私にとって過去の自分の無知を何とかして挽回しようと思って取り組んだものだったのです。

今回、こういう機会を与えられ、過去の自分が何をしてきたかということ、色々と振り返っ

てみました。かつて自分が放送の現場で働いていたということ、そして非常に未熟な部分があったということ、そうした体験が後々になって、自分をメディアの歴史の研究へと誘っていったのではないかと、今実感しています。良いチャンスを与えてくださって、ありがとうございました。

——素晴らしいお話を聞かせていただき、ありがとうございました。最後になりましたが、これからメディアについての研究を志す若い人たちに、アドバイスをお願いします。

竹山 若い人たちにアドバイスするなど、私にとって、とても面白いことです。それでも、せっかく機会を与えてくださったのですから、私が過去何十年を振り返ってみて、自分なりに考えてきたことを申し上げておきたいと思います。論理的なことではないのですが、それは三つあります。



外国人記者クラブのフリーダム・フォーラムで「終戦を告げるラジオ放送」を発表する竹山さん(1995.8.30)

インタビューを終えて

今回のインタビューで、竹山さんから、戦前・戦中・戦後にまたがる放送の歴史について、貴重な話を聞くことができた。

放送の歴史的な瞬間に自ら立ち会い、その時々を放送を彩ったキー・パーソンと直に対面している竹山さんの肉声からは、体験者のみが醸し出すことのできる臨場感を感じ取ることができた。

そして、『兵に告ぐ』や『玉音放送』といった戦前・戦中のラジオ放送が歴史に大きな転換をもたらすことになったことや、戦後における民間放送の創設に、南博博士や和田信賢アナウンサー、作曲家の三木鶏郎氏などの才能にあふれた多彩な人々が深く関与していたことなどを、改めて詳細にわたって知ることができた。

竹山さんの話を聞いて、放送の歴史の流れの中には、送り手・受け手にかかわらず、放送に込められてきた人々の思いや取り組み、知恵が重層的に織り込まれているのだということを強く実感した。そして、竹山さんに続いて、放送を巡るこうした人々の営みを正確に拾い上げて記述し、それを後世に語り継いでいくことの重要性を再認識した。

「本当に好きなことを続けていれば、必ず良い結果がついてくる」という竹山さんの言葉は我々を強く勇気づけるが、そこには、竹山さんが歩んでこられたこれまでの人生が端的に集約されているように思われてならない。

(かとう もとのり)

一つ目は、直感です。自分で感じる、その直感を大切にすることではないかと思えますね。メディアについての色々な資料に接したときに、自分の直感で取捨選択をして、「これだ」というものを見つけること、そして自分の直感力に自信を持つということではないかと思えます。

二つ目は、継続、続けることですね。直感で「これだ」とつかんだもの、それを継続していく必要があると思えます。メディアというものは、社会の移り変わりとか、人々の考え方や、技術革新で、どんどん変化していく。この変化のプロセスを追いかける必要があります。対象への継続的な追究が大事だと思います。

三つ目は、好きなことをやるということですね。興味を持ったこと、面白いと思ったことをとことん追究するということです。自分が面白いと思ったことは追究したくなるものです。また、それを受け取る人も、好きなことを一生懸命やっているものに対しては、やっぱり面白いと感じてくれるのではないのでしょうか。ですから、本当に好きなことを続けていけば、必ず良い結果がついてくると思えますよ。

ところで、従来の放送史研究では「送り手」「送り内容」が主流をなしていたように思いますが、これからは「送り手」だけではなく、放送の「受け手」に目を向けた研究が非常に重要になってくると、私は考えています。こうした研究を進めていくには、資料の発掘に大変な手間がかかります。このようなときこそ、直感を働かすことによって大きな成果を挙げることができるのではないかと思えます。皆さんのご健闘を期待しています。

(2011.6.21)

注：

- 1) 大正 10 (1921) 年 11 月に設立された官立の旧制 7 年制高等学校。スマートな校風で知られ、東京帝大への進学率は 8 割に達した。戦後の学制改革で新制東京大学に包括された。
- 2) 1865 年に設置された、アメリカ合衆国ニューヨーク州イサカ市に本部を置く大学。アイビー・リーグに属し、多くのノーベル賞受賞者を輩出している。
- 3) 南博『学者渡世 心理学とわたくし』(1985 年、文藝春秋) p61
- 4) (3) 前掲書 p101
- 5) (3) 前掲書 p102
- 6) かとう・ひでとし、1930 年生、評論家、社会学者。文明論、メディア論、大衆文化論など多彩な分野で研究活動を展開。京都大学、学習院大学などで教鞭を取ると共に、国際交流基金日本語国際センター所長などを歴任。
- 7) たつの・かずお、1930 年生、元朝日新聞記者、ジャーナリスト、エッセイスト。昭和 50 ~ 63 (1975 ~ 1988) 年「天声人語」を執筆。
- 8) いしかわ・ひろよし、1933 ~ 2009、社会心理学者、成城大学教授。大衆文化論、広告論、若者論などで幅広い著述を行った。
- 9) さとう・たけし、1932 ~ 1997、法政大学、一橋大学、大東文化大学教授を歴任。マス・コミュニケーション論、情報社会論などを研究。
- 10) たかの・えつこ、1929 年生、映画運動家、岩波ホール総支配人。
- 11) 中田幸子 (なかだ・さちこ)、1929 ~ 1985、旧姓・田辺。専修大学法学部教授、世田谷ボランティア協会理事長。民法、社会福祉論を研究。
- 12) (3) 前掲書 p134
- 13) 1946 ~ 1996 年の 50 年間にわたって刊行された月刊の思想誌。昭和 21 (1946) 年、鶴見俊輔・丸山眞男・都留重人・武谷三男・武田清子・渡辺慧・鶴見和子の 7 人の同人により創刊された。
- 14) よしだ・ひでお、1903 ~ 1963、実業家、電通第 4 代社長。広告の鬼と呼ばれ、「鬼十則」を作ったことでも有名。
- 15) 昭和 8 (1933) 年 8 月に設立された、当時の満州国及び関東州における放送を含む電気通信事業を独占経営していた日滿合弁の国策会社。昭和 20 (1945) 年 8 月、ソ連軍の接収により消滅。
- 16) NHK アナウンサー史編集委員会編『アナウンサーたちの 70 年』(1992 年、講談社) の巻末資料「NHK アナウンサー一覧」を参照。
- 17) 戦前の無線電信法に替わって、昭和 25 (1950) 年 6 月 1 日から施行された電波法・放送法・電波監理委員会設置法の三法。NHK と民間放送の併存体制が確立した。
- 18) につた・ういちろう、1896 ~ 1965、新聞経営者、東京朝日新聞広告部長、取締役を歴任。その後、電通を経て、昭和 38 (1963) 年、読売テレビ副社長。
- 19) いしかわ・きんいち、1895 ~ 1959、ジャーナリスト、随筆家、翻訳家。主に毎日新聞に所属して活動した。南博の親戚に当たる。
- 20) あんどう・つるお、1908 ~ 1969、演劇評論家・作家。「巷談本牧亭」で直木賞受賞。
- 21) まつうち・のりぞう、1890 ~ 1972、NHK アナウンサー。主にスポーツ実況で活躍。戦前の東京六大学野球の実況中継における名調子で人気を博した。
- 22) わだ・しんけん、1912 ~ 1952、NHK アナウンサー。『玉音放送』の他、戦前の大相撲の双葉山・安芸ノ海戦の実況、戦後の『話の泉』の司会者として活躍。パリで客死。
- 23) なかむら・しげる、1901 ~ 1978、NHK アナウンサー。昭和 11 (1936) 年 2 月 29 日、2・26 事件の叛乱軍兵士に投降を呼び掛ける『兵に告ぐ』を担当。
- 24) まつだ・よしろう、NHK アナウンサー。ツェッペリン号来日実況・東郷元帥国葬・大正天皇御大葬実況などを担当。
- 25) かさい・みつみ、1898 ~ 1970、NHK アナウンサー。昭和 11 (1936) 年ベルリンオリンピック女子競泳 200m 平泳ぎ実況での「前畑ガンバレ!」で有名。
- 26) しかくら・きちじ、1885 ~ 1969、毎日新聞元専務。昭和 26 (1951) 年ラジオ東京 (現 TBS) 創立と共に専務。昭和 35 ~ 40 (1960 ~ 1965) 年社長を務める。
- 27) うちむら・なおや、1909 ~ 1989、劇作家。NHK の連続ラジオドラマ『えり子とともに』で広く知られる。初期のテレビドラマを数多く手掛けるなど、多方面で活躍した。
- 28) 全日本 CM 協議会編『ACC / CM 年鑑 '61 / '62 / '63』(1964 年、三彩社) p245
- 29) みき・とりろう、1914 ~ 1994、作詞家、作曲家、放送作家、演出家。NHK ラジオ『日曜娯楽版』の「冗談音楽」で人気を博す。多くの商業ソングを手掛けた。
- 30) 1897 ~ 1991、1930 年代のアメリカを代表する映画監督。『或る夜の出来事』『オペラハット』『我が家の楽園』で 3 度アカデミー賞監督賞を受賞している。
- 31) 竹山昭子「アメリカの戦争プロパガンダ映画『汝の敵日本を知れ』(Know Your Enemy : Japan) のメッセージ分析」『メディア史研究』vol.7 (1998 年 3 月、ゆまに書房) p 64 ~ 81